

デューラーの「絵画論」(2)

序論と男性均衡論の草稿の試訳

美術学科

下村耕史

Dürers Drafts of his "On Painting" (2)

a translation by Koji SHIMOMURA

序

本稿は前回の報告(第20巻, 1989年)と同じく Dürer: Schriftlicher Nachlass, herausgegeben von Hans Rupprich. Zweiter Band. Berlin 1966 を底本として試みられたデューラー未完の「絵画論」の草稿の訳である。前回ではデューラー自筆の草稿に限ったが、今回はルップリヒの上記の本に収められているが、必ずしもデューラー自筆とは認められていない草稿も含むことにした。当時の美術観を広く知る上で参考になると考えられるからである。なお凡例は前回に従う。

Nr. 8 「尺度」と倫理, 自然, 人体におけるその意義(ロンドン草稿, 1513年以前, R. 2. 127~128頁, デューラー自筆でもなくピルクハイマーの筆でもない。)

ギリシア7賢人の教えのひとつは, 尺度(マース)は倫理的にも自然的にもあらゆるもののなかで最善のものである, ということを私は聞いている。全能の神はすべての被造物を数と重さと尺度で創られた程に, 尺度を重んじられたのである。尺度を用いる理論(クンスト)や方法ほど貴く尊重されるし, また上位にあるとみられる。尤もそれは神学, 形而上学, 自然の知恵への愛といった聖なる学問(クンスト)には及ばないが。絵画の理論(クンスト)ほど様々な形で尺度を必要とするものは外にない。それはあらゆる尺度の源たる

幾何学と算術を必要とするだけでなく, 他の理論以上に, 眼を欺く理論たる透視図法(ペルスペクティヴァ), 反射光, 測地法, 地理学などの尺度の理論に依存する。

数学的に優れた形は球である。被造物の最大部分等[この箇所はラテン語。明らかにある書からの引用]。

総ての被造物のなかでも人間は最も貴ぶべきものである。絵画に描かれる最大のテーマは人の形を表すことである。地に棲む動物は自己の種属のみを好ましいとみるが, このような性質は人にもあり, 誰でもそれを自己のうちに感じる。

また人体の尺度は, その形が直線や円弧で表せないだけでなく, 不規則な曲線を輪郭線としてもつので, 殊の外把握しにくい。幾何学に通じた人ならば, そのことはよく分かる。というのも幾何学の権威エウクリッドの書物には直線と円弧についてのみ記されており, それらの線に囲まれる, プラトンの説く5つの正立方体「4面体, 6面体, 8面体, 12面体, 20面体」や円錐や円筒のような立方体についてはその測定の仕方を教えないからである。幾何学は対象の素描や彩色に関係するのではなく, 対象の計測に関係する。

馬は最も人の役にたつ動物で, 気晴らしにも仕事のためにも大変望ましいものである。

反射光, 鏡, 光学, 透視図法の理論。

ここで述べられる理論(クンスト)は画家と彫刻家だけでなく, 人体に共通する尺度を測定によ

り把握しようと望む総ての人に役立つものである。

この理論により様々な角度と線を用いて、山の高さおよび野と森と水と風景の広がり、また家々や穹窿や円柱や尖塔や円が、泉や溪谷や窪地の深さが、また同様に暗闇の影の深さと明るい光の輝きの尺度が測られる。またそれは、単なる直線によるだけでなく、視光線〔眼から対象に至る直線〕により、あるいはある物が投影されて映し出されるような、水や鏡やその他光沢のあるものからの反射した視光線により、またある物が大気と水、また大気とガラス、あるいはその他その接触面で視の屈折がみられる2つの異なる透明体により生ずる屈折した視光線により測られねばならない。このことがまた、画家が視の対象をただ測るだけでなく、その尖端が眼にありその基底が対象であるような円錐状に対象の線を引くために、理論（クヌスト）を用いる主要な理由なのである。幾何学と透視図法に通じた人が知るように、その正確な尺度は特別に工夫しなければ得られない。

Nr. 10 生まれながらの知識欲。認識の限界。造形芸術の機能。均衡論の役割。均衡論により制作した芸術家が古代人に高く評価されたこと。分割法（タイラー）の説明。（ロンドン草稿，1513年頃，R. 2. 134～137頁。デューラーの自筆ではない。）

それがいかに有用で楽しげにみえても、実用的なものへの人の欲求は、それが毎日使用され過剰に充たされることで、結局飽きることになる。しかし旺盛な知識欲（これは生まれながら各人にそなわる）は、このように飽きることもなく、不快になることもない。たしかに人の心は知識や能力に関して完全に満足することはなく、ほんの一部を得るにすぎない。だがその知識をある仕方認識の明確な対象に仕上げることで、多くの人々のまだ気付かない無知に反対して、後世の人たちが我々に好意を寄せて更にその探究を続けるようにすることはできるのである。実際、軽やかな風のように耳にはいった事柄が我々を活気づけ、それについての知識をもつように我々を促し、実

際にもものを見ることのできる信頼すべき眼に確かなこととして映る物事よりも、それの方が我々の関心を惹くことを、学識ある意見や日々の経験は、教える。このことからして、絵画および彫刻の理論と実践は高貴なものに見なすべきで、貴ぶべき自由学芸の最下の列にそれらを入れてはならない。というのもそれらの理論と実践は、理性の最も内なる眼に鋭く感得されるだけでなく、同時に身体的感覚にも好ましい快適さをも示すので、そのことはそれらの根源が最も本質的なものに根差すことを教えるからである。それで、対象を自然と生物にふさわしい形で表現すれば、作者はそれだけ完全さを自己のものとなし、その表現は神的なものに見えることになる。このようなことは無数の独自性をもつ比例によって最もよく為すことができる。過ぎし時代の古代人たちが書き残した有益な総ての事柄は、特にギリシア人たちに、また他の国民にましてローマ人たちに、尊ばれたのである。彼らはその時代の工匠たちを高く称賛して愛好し、厚く報いた。このような工匠としてフィディアス、プロクシテレス、アペレス、ポリクレートゥス、パラシウス、リシプスその他の優れた人々がいた。彼らはこの理論を熱心に探究して根本的原理を発見し、最終的に彼らの優れた作品が好ましく、素晴らしく、特に理論に合っていることをはっきりと示したのである。それにより彼らは称賛と富と国民的人気を勝ち得ただけでなく、それ以上に大きな自由を得て、高貴で尊敬すべき歴史家と詩人たちの不滅の憶い出となり、その幾人かは嚇嚇たる名声の頂きにあつて、彼らの記念像の円柱の建設さえみたのである。

かつて私はこのようなものを実際に見たことがあり、これらの誇りと栄光と有用さがかくも無知な人々のあいだで蔑ろにされるという現代の貧困を思いやり、その当然の報酬のことはともかくとしても、ほんのわずかな人々にのみ好まれ探究され理解されているにすぎない理論が、同様にその厳かな輝かしい光を奪われて殆ど暗くなりては死滅しかけていることを、尋常ならざる嘆かわしいことと思うのである。それが多年に互る消滅のた

めなのかそれともいいかげんな人間の軽蔑すべき怠慢によるのかは、それぞれの判断に任せよう。それで忘却の淵に沈まんとする消えかかったこの燃えさしに再び点火するために、最大の努力を払おうと私は大いに心を動かされたのである。こうして迷える者に正しい道が、見究めようとする者に真の認識が、理論を求める者に源泉が得られるようにしたい。あやふやでいまにも崩れそうな理論とその実践を確かで強固なものとするために、私は神の助けをかりて、釣り合いのとれた、好ましい、古代人たちにも適ったこの比例について記述することを敢えて企てた。そうすることで昔から我々が法で義務づけられている正しい兄弟愛の幾分かを果たすことになる。その資格が私にないだけでなく、この理論を開花する種子として茨の多い不毛の大地に植えても、誰からも顧みられないままに見過ごされるかもしれないけれども、私としては勤勉に求めてきた多くの知識と長きに互った熱心な努力と仕事の成果を、現在と将来の美術家たちにここで伝えたい。それは理論の探究者たち（私の知らない人々であるが）が真の好意と愛情と友情で私と永遠に結ばれることを、私が希望するからである。その仕事が如何に優れて有益であっても、それらを常に汚し風船玉のようにしてしまう、中傷という鋭い舌鋒の致命傷を与える毒は、いつでも注入されるように用意されている。しかし私としては、この拙著が、幾人かの真に判断のできる人々という、無傷のままに無毒化する一角獣のために、このような致命傷から逃れられると、確信している。

これから述べる比例、つまりシメトリアといっても間違いではないが、ドイツ語で肢体の分割と呼ばれる比例について述べるに当たって、対象を損なわない程度に、できるだけ簡潔に私の意見を記したい。つまり記述していくうちに必要と思われる総ての部分の数字と文字で呼ぶことにする。そうすることで、理解が一層容易になり、実用に供され易いためである。

ある種の比例を作ろうとおもえば、次に述べる意見やそれと似た意見が利用できることを、まず

理解しなさい。定規なりその代用となるものを手にとり、意図されている比例の長さの線分をそれに引いて、その始まりを a、終わりを b としなさい。これからしばしば ab というとき、それは ab 内の比例全体の長さのことととりなさい。そして想定された長さの線 ab を 2~50 等分あるいは必要ならばそれ以上に細かく分けなさい。その分割に応じてそれらの点を $1/2, 1/3, 1/4, 1/5, 1/6, 1/50$ というようになづけ、それを記しなさい。これから後、男なり女の肢体がこのような分割の長さなり幅であるというとき、それはつねに全長 ab の分数のことと理解しなさい。これらのことに留意して、この著作全体の一般的規則と基礎をしっかりと守りなさい。

その際、長さ ab を 1 とする分数で表しようのない部分の大きさを表す場合、 $1/12 + 1/36, 2/11 + 1/20, 1/8 + 2/49$ というように、2 つ以上の分数を組み合わせて表すことにする。時には簡潔にするために $1/10$ の $1/3$ というように、長さ ab の分数の分数で表すこともある。またそれが作品を作るうえで有効かつ有益であれば、その限りでまた多様な仕方でいま述べたことを変えることもできる。またここに示したよりもずっと正確に測りたければ、各部分を更に細かく分けることもできる。

すでに述べたように、極めて簡潔に平易な仕方と教えることが私の方針である。この教えが如何に些細なものであれそれを熱心に研究すれば、そこに多くの秘密と驚異が見いだされるであろう。だが対象の生物にふさわしい尺度の増減ができなければ、為されることは総て徒労に終わり、その作品は好ましくはみえない。

(上記に続く文は、今回は省く。)

Nr. 11 分割法による人体比例測定の教示。平面分割。(1, 2ともロンドン草稿、ともに1511/13年, R. 2. 137~140頁)

1

人体比例の以下に続く記述に先だって、非常に簡単な測定法のことを知ってもらわなければなら

ない。

$1/2, 1/3, 1/4, 1/5$, から $1/50$ ないし $1/60$ まで、必要なだけ数字をあげる。

それは人の全長の分数なのである。

人の長さを ab とせよ。

男なり女なりの肢体部分が $1/8$ の長さや幅であると私が述べるとき、それは長さ ab の $1/8$ を意味する。

それで必要に応じて $1/2$ から $1/100$ 以上までの分数に関わることになる。

また $1/8$ の $1/5$, あるいは $1/11$ の $1/3$ その他おこりうる分数をあげるとき、それは長さ ab の $1/8$ とその $1/5$, あるいは長さ ab の $1/11$ とその $1/3$ のことを意味する。

それで尺度のことでこのようなことが述べられていけば、それは分数の分数のことととりなさい。多様な方法で為そうとすれば、またそれを変えることができる。

また、 $2/13, 3/12, 2/11$, その他おこりうる分数のように分子を複数としても用いるが、その際 $11, 12, 13$ はつねに長さ ab の分数の分母のことであり、それらを分母とする分数の複数形も長さ ab の分数のことである。

同じ分数であっても長さ ab の分数でない場合、そこに文字を付すことにする。

ある種の比例を作ろうと思えば、その比例の長さだけの定規をとってそれに $1/2$ から $1/50$ までの分数の数字を記しなさい。

その後各部分を区切って、それを更に $1/3$ にも $1/5$ にも分けることができる。

この方法により比例について次に記されるいかなる方法よりも、はるかに精確にすべてのものを分かち測ることができる。

私としてはこれから述べるあらゆることを最も平易な方法で為すことにする。

しかし君が熱心に求めさえすれば、この単純な方法でも多くの驚異が見いだされるであろう。

次に述べる比例は分数として記される。これを次のように理解しなさい。

人体像を作ろうと思えば、その像の全長をとり、必要に応じてそれを分かちなさい。

1 は全長のことである。

$1/2$ は全長を 2 等分したものである。

次に $1/3, 1/4, 1/5, 1/6$, また $1/6$ から $1/100$ までというふうに必要なに応じて全長を分かちなさい。

次に線 ab を引いて、 $1/2$ から $1/30$ まで分かち、それに数字を入れなさい。

次にその数字を次のように細分しなさい。

$1/30 \times 2$ は $1/60$ である。

$1/30 \times 3$ は $1/90$ である。

$1/29 \times 2$ は $1/58$ である。

$1/29 \times 3$ は $1/87$ である。

$1/28 \times 2$ は $1/56$ である。全長は ab である。

$1/28 \times 3$ は $1/74$ [./] である。

2

これから述べる人体比例の測定については、全く単純な方法でこれをおこなう。その際 $1/2, 1/3, 1/4, 1/5, 1/6, 1/8, 1/12$ などの分数を必要に応じて用いる。

分数の分母となるのは人の全長である。 ab を人の全長とせよ。

男なり女の肢体が $1/8$ の長さや幅であるというとき、それは ab の $1/8$ を意味する。 $1/2$ から $1/100$ までの各分数についても同じであって、必要に応じてそれを用いなさい。また $1/8$ の $1/5$ とか $1/11$ の $1/3$ などの用いかたもする。それはこれからよくあるように、 ab の $1/8$ とその $1/5$ をあるいは ab の $1/11$ とその $1/3$ を意味する。

後に図解で示すように、こうした分数の分数をも用いる。また同じでない分数を加えて示すこともある。

勿論自分の仕方でもなそうと思えば、このような方法を多様に変えることができる。

また $2/13, 3/12, 2/11$ などのように分子を複数として用いることもある。このようなことはよくあるが、その際 $13, 12, 11$ はつねに ab の分数の分母のことである。

同じ分数であっても ab の分数でない場合、そ

ここに文字を付すことにする。

ある種の比例を作ろうと思えば、定規をとってそれにその比例の長さだけの線を引き、そこに1/2から1/50までの印をつけなさい。

その後各部分を区切って、必要に応じてそれを更に1/3, 1/5, 1/7, 1/9にも分けることができる。

この方法により比例について次に記されるいかなる方法よりも、はるかに精確にすべてのものを分ち測ることができる。私としてはこれから述べるあらゆることを最も平易な方法で為すことにする。

君が熱心に求めさえすれば、この単純な方法でも多くの驚異が見いだされるであろう。だが対象の生物にふさわしい尺度の増減ができなければ、為されることは総て徒労に終わり、その作品は好もしくはみえない。

分けられた線で平面を分けること。

線 ab を定めて、それを cdefg で分ける。その線の下に平面 abcd を定めて、線 ab 上の各点から垂線を下におろせば、平行線 cdefg が平面 abcd を貫く。こうして平面 abcd には線 ab と同じ分け方がなされる。

更に別の平面1234を定めなさい。この平面を平面 abcd よりも広狭自由にしたいければ、線 ab から平面 abcd が分けられたように、別の線からその面は分けられる。随意にそれは分けられる。

cdefg で分けられた線 ab が abcd と1234という2面を平行線で同形に分けたように、それは延長線 op をも分ける。

線 ab が2面 abcd と1234を上からの線で分けたように、それはまたそれらを斜めにも分ける。

線 ab を定めて、それを cdef で分けよ。線上の各点から2面 abcd と1234に斜めに線をおろせば、最初に示したように、両面とも平行線で同形に分けられる。

いま述べたことから、ab が cdefg で分けられたのと同じ比例で、水平線12と ab は分けられる。線 ab と同じ比例で水平線12が分けられたように、その再分割された水平線と同形に op は分けられる。

Nr. 12 人体構成に関する記述の覚書と今後の計画。(ロンドン草稿, 1513年頃, R. 2. 140~141頁)

今後為すべきこと:

最初に7頭身の男について記すこと。人体の主要3部分についての規則[胴部の大腿部にたいする長さの比は大腿部の脚部にたいする長さの比と同じであるという]を示すこと。[8頭身の男の]長い頭部を作ること。

次にその男と対になる女性について記すこと。

以下のことは為された:

8頭身の男を描いて、その3種の変種を作った。

次のことを為すこと:

その頭部と手と足について記すこと。

以下のことは為された:

この男と対になる8頭身の女性。

それは描かれた。

次のことを為すこと:

この女性の頭部について実際に記し、描くべきこと。

次のことを為すこと:

9頭身の男と女性。

次のことを為すこと:

10頭身の男と女性。

次のことを為すこと:

幼児。その長さを男の1/3にする。

Nr. 13 1523年に仕上げられた人体均衡論の草稿の、序論のための覚書と構想。(ロンドン草稿, 1523年頃, R. 2. 141~144頁)

1

それで、人体像は極めて精確に測定されるべきだという認識がどうして得られるのかを、私は考えてみた。それは尺度が正しく用いられれば、それにより総ての作品が理論に適うように作られるからなのである。

肢体の長さ、人体の主要部分の幾つの特徴あるものの高さや低さを、線で表してそれらを並べて示したい。

このような測定を実現して、人の外形を測定することで人体像が表現でき、また画家や木材、石材その他固い材料を彫ったり金属を鋳造する彫刻家たちがそのような測定を利用することができることを私は示したい。その序論と報告…

2

まずこの書で意図することは、私の理解する僅かな内容を、それを求める人々に伝えることである。彼らはまだそれを知らないからである。だがこのような理論（クンスト）に精通して、それを正しく理解し作品の上で実践している人々がいるならば、その人たちこそその優れた知識を私に教授して下さることを乞い願うものである。そうして頂ければ、その粗雑な素質が妨げとならないかぎり、感謝の念をこめ絶えず習練を重ねて熱心にその教えを究めたい。そうすれば彼らへの称賛も一層広まることになる。

3

神に賦与され、またたゆまぬ習練により得た私の僅かな理解を、まだそれを知らない、この理論を求める人々に誠実に伝えることこそ、この書を企てた私の意図なのである。

この書を企画した意図は偏に、神を称え万人の役にたつことにある。

私がこの書を世に出す理由は、ここに記される理論に通じていないが、それらを求めるに熱心であり、しかも私がつたことのできたような [ヤーコポ・デ・バルバーリを暗示している]、それらの理論を教えてくれる師匠に恵まれていない、若い徒弟たちに等しく役にたつて、神の栄光を称えるためである。

この著作はそのためにかかれたものである。

私の不十分な理解力。

この書では人体の外形線と尺度以外のことについては述べられず、教えられない。

私たちがそれらの理論を誠実に伝えようとするのは、彼らがそれらに精通せず、しかもそれらを熱心に求めるからである。

それらに深く精通している人々にはそういうことはしない。私の方が彼らから教えをうけたいと思っている。

それで、この書に含まれる貧弱な理論と不十分な理解力にもかかわらず、このささやかな教示が私が怖ず怖ずながらも世に出すことを、どなたも理解して下さるであろう。それに加えてこのような書なり理論が私にも一般公衆にも今に至るまで知られないままでありまたそのようなものも我々に伝わっておらず、更にまた巨匠たちについても何も知られていないので、私としては神を称えて、理論を熱心に求める若い職人たちの一助となるために、神が私に許したこの僅かな理解の内容を、時間をかけてこの書を読むことのできる人たちに誠実に伝えたい。というのも、何の教示も得られない者にとって理論を探究することが如何に至難であるかが、私にはよく分かるからである。私もそれを十分に味わってきた。理論に精通した親方たちは我々の間では極めて少ない。千年もの間、理論について何も伝えられてこなかったからである。ローマが滅びたとき、これらの理論も総てともに滅びてしまった。これらの理論は全く消滅した。それらは150年前になって漸く再び知られるようになった。

私としては巨匠や大家たちに教えるつもりはない。反対に彼らが私をよく導き、その熟練した手で、明晰な理性と理論から私の誤謬と欠陥を指摘してくれることを、彼らに懇願する。大きな感謝の念をこめて彼らから教えをうけ、私の粗雑な素質が私を妨げないかぎり、それに熱心に従い、絶えず習練を重ねてその改善に努め、その理論の尊厳と彼らの栄誉を広めるための一助になりたい。

私はまた彼らのなかに、何か必要な良きものやそれに役立つものを集めた人がいれば、それらを世に示して、神に仕え公益に利して、秘密のままにそれらを隠すのではなく寛大に分ち与えてくれることを懇願する。

ところで本論にはいるまえに、私の企てを非難せず私を心より庇ってくださることを、読者諸兄にお願いしたい。というのも、私の学ばなかつ

た雄弁術や世界の測定のための理論を示そうというのではなく、神の助けをかりて厳しい習練により得たことを明らかにするために、この著を書くからである。

それでこの書に記されることを善意に受け入れて、より優れた別の書から学ぶまでこの書で満足してくれるよう、若い職人たちをお願いします。また私はこの書で彩色のことを教えようというのではなく、人体像の測定の仕方を示したいだけなのである。それは人体像を作らなければならない総ての職人、画家、金細工師、彫刻家、石工、金属鑄造師、絹刺繡師、陶工等が、それを利用できるようにするためである。

4

私が何か素晴らしく価値のある本を著して自己の優越を他人に見せようとしているとは、どなたも思わないでほしい。それは私の意図からほど遠い。この書には貧弱な理解力と僅かな理論しか示されていないことを、私自身がよく知っているからである。非難の余地が何もないようなものを作るほどの完璧さは私にはないこともよく知っている。幾人かの人の不興をかうかもしれないけれども、それでも神に賦与された私の貧弱な理解力を善意から誠実に各読者に、そして特に理論を求め若い職人たちに伝えようと敢えて企てたのである。それで彼らがこのような緻密でない教えを好意的に受け入れて、より優れた別の教えを受けるようになるまで、それで満足するようにお願いします。人体を測定するこの理論は失われて使われなくなっていたが、150年前から再び行われるようになったことはよく知られている。だがこの理論の研究を再び始めた人たちは、それを図で示したり、書物でそれを著したりしてはいない。それで理論を教える人の数は我々の間で極めて少なく、また各自が自分の理性と習練から理論を求め見いだすことも、また至難である。それが如何に難かしいかを、私はよく知っている。それで今日の再生 (widererwaxsung) に至るまでの千年間に、我々に伝えられるべき理論が考究されずに消滅してし

まったので、私は巨匠の方々に、その天賦の才を我々にも分かち与えられることを懇願する。また彼らのなかに、このような有益で優れた理論に精通している人がいれば、それを世に示して他人にも寛大にそれを伝えることを切にお願いする。この書が巨匠たちを刺激して、私が貧弱なものを敢えて世に出すことを知って、彼らの偉大な理論を世に示して大きな尊敬を勝ちうるようになることを、私は希望する。彼らが私よりも優れたものを出すならば、それは私の望むところである…

Nr. 14 測定と比例の、造形芸術家にたいする意義。分割法の説明とその応用。男の人体全長の29分割。8頭身の男の3素描の制作。転移法。尺度の指示。(ロンドン草稿, 1513/23年, R. 2, 145~149頁)

1

測定しなければ、あるいは正しい尺度を理解しなければ、優れた人体像を作ることはできない。また優れた人体像を作るには大変な苦勞と努力が必要である。無思慮なままではうまくいかない。人体像の輪郭線はコンパスでも定規でも引かれないからである。それでどうすれば人体像が自然にふさわしい形で最も正確に測られるのかを見いだすことが必要となる。正しく測ることで理論に適ったものが作られるからである。

最初に、私の考え出した測定法を出来るだけ簡潔に説明したい。

君が人体像を作ろうと思えば、この意見を採用することができる。

定規なりその代わりとなるものをもって、それに人体像の長さを2点で記し、上がa下がbのその2点間を直線で結びなさい。これから以後しばしばabというとき、それはab間に含まれる人体像の全長のこととつねにとりなさい。次にこのabを分ける。ab間の長さは全長であり、これを1とするからである。これから記す数字が小さければ、それを分母とする分数の表す長さは大きく、分母の数字が大きければ、それだけその分数の表す長

さは小さい。

次に ab を 1 点で 2 等分する。その 1 方は $1/2$ になる。ついで ab 間の線を a から点で $1/3, 1/4, 1/5, 1/6$ というように $1/50$ まで分ける。必要であれば、線 ab をもっと細かく分けることもできる。

これらの分けられた線分を総て $1/2, 1/3, 1/4, 1/5, 1/6, 1/7$ 等の分子を 1 とする分数で表す。線 ab の横にそれら総ての線分の点とそれらの点を結ぶ線を引く。その際利用し易くするため長い線分から順に ab の横に並べる。この定規なり道具を用いることを「分割法」と名付ける。そして男性なり女性の人体像がかくかくの分数の長さや幅や厚さであると後に言われるとき、それはつねに、次の図解で見るように、長さ ab からとられた長さのことであると理解しなさい。これが私の最初に考え出した測定の基礎である。これと異なる別の方法でも更にもう一度測定するつもりである。

このような測定を行う際に、人体のいかなる部分も ab の長さを 1 とするその割り切れる分数で表せるとは限らないであろう。それよりも多いか少ないかになるからである。その場合には $2/7, 1/19+1/20, 1/14+1/15$ というように幾つかの分数を組み合わさなければならない。そのようなことはしばしば起こる。分数を実際に用いる上で、大小さまざまな分数の組み合わせが必要となる。

またこれらのことを実際の必要に応じて様々な仕方でも変えることもできるし、実際の作品では ab からとった各部分をここで記される以上に更に細分することもできる。ここで総てのことを必ずしも厳密に規定しようというのではない。だからこの書に示されるこれらの私の意見よりもはるかに厳密なものを人それぞれ求めるべきである。この書のもつより良い部分を出来るだけ見つけ出すようにすることを、各人に薦める。この書では若い人々のために近道をとる。それでも、この簡潔な意見に従って、そこから多くのことを学びとることを彼らに期待する。

それを使って測定しようと思っている分割法が準備されたので、それで測定しよう。

作ろうと思う男性の丈の高さを表す 3 本の垂線

を当間隔に引き、それらの周りに十分な空白があり、3 線とも同じ高さになるようにする。3 垂線の上下に 2 本の水平線を通す。上の水平線は頭頂部、下のそれは足裏となるはずである。最初の垂線上に男性の側面像を、第 2 の垂線上にその正面像を、第 3 の垂線上にその背面像を作る。

この定規がきちんと調べ始めることにして、最初の垂線上に男性の側面像の各肢体の長さとその間の諸部分の各点を測り、その垂線上に頭頂部から足裏までのそれらの点を記して、それらの点を貫いて総て同じ平行水平線を引く。数字で書かれている各肢体の長さの線分を男性像の外側に垂線として取り出して引き、数字をそれに添える。すぐに各肢体の長さが分かるようにするためである。

各肢体の水平線のなかで主なものを以下に挙げる。

1. 頭頂部。
2. 額。
3. 眉毛。
4. 鼻。
5. 顎。
6. 肩の高さ。
7. のどの凹み。
8. 胸。
9. 前の腋。
10. 後ろの腋。
11. 乳頭。
12. 胸下。
13. 脇腹。
14. 臍。
15. 腰。
16. 腰の下端。
17. 腹の下端。
18. 臀部の下端。
19. 両大腿部間の隙間。
20. 膝上の上。
21. 膝上の下。
22. 膝中央。
23. 膝下の上。

24. 膝下の下。
25. 外側のふくらはぎ下端。
26. 内側のふくらはぎ下端。
27. 足の甲の高さ。
28. 脛骨の外側の踝の下端。
29. 足の親指の前の高さ。

図示された人体像の水平線上に以上の言葉を書き添え、私の意見が徹底して理解されるようにして、それらを以下の総ての人体像で用いることにする。

画家、石工、彫刻家、鋳造師、金細工師、その他この理論を用いて手でそれを実践する職人たちは、このような意見を採用することができる。

さて8頭身の男性から測ることにする。後に書かれるその男性の各肢体の長さを示す平行な水平線を、男性の側面像の最初の垂線から、その正面像と背面像の他の2つの垂線に、必要に応じて引き延ばす。そのために考案された図形を描いて、それに名を与えよう(転移法)。この方法により平行線は一方から他方に正確に移される。

次のことに留意すること。

頭頂部と足裏を垂線上の1点でそれぞれ中央から分けられるほどに、男性像を「真直にして」見上げるように高くする。

頭頂部から顎の下端まで。

腕が胴体部の図の見えかたを妨げないように、腕の図をその横に特にとりだして示す。

〔腕の厚さは〕 $1/21$ 、手関節で $1/36$ 。手の厚さは $1/34$ 。

男性の正面像の幅は幾つかの水平線上で次のように変えられる。

男性頭部の線上の幅は $1/10$ である。額中央の幅は $1/19+1/18$ である。眉毛上の幅は $1/10$ 。耳上の幅は $1/9$ 。鼻の線上の幅は $1/12$ と少々。顎の上での頸部の幅は $1/15$ 。肩肉の高さでの幅は $1/13$ 。のどの凹みの線での幅は $2/9$ 。胸上での幅は $1/4$ 。両腋間の幅は $1/11+1/12$ 。乳頭間の幅は $1/8$ 。胸下での体の幅は $2/11$ である。臍上での幅は $1/11+1/12$ 。腰での幅は $1/11+1/12$ 。腰の下端と腹の下端での幅はそれぞれの線上で $1/5$ である。

2

測定しなければあるいは正しい尺度を理解しなければ、優れた人体像を作ることはできない。優れた人体像を作るにはよく熟考して大変な苦勞と努力を重ねることが必要である。それは偶然にうまくいくというものではない。人体像の輪郭線はコンパスでも定規でも引かれないからである。それでどうすれば人体像が自然にふさわしい形で最も正確に測られるのかを見いだすことが必要となる。正しく測ることで理論に適ったものが作られるからである。

最初に、私の考え出した測定法を出来るだけ簡潔に説明したい。君が人体像を作ろうと思えば、この意見を採用することができる。

まず、幅のある長い定規なりその代わりとなるものをもって、それに人体像の長さを2点で記し、その2点間を直線で結びなさい。上の点は頭部の高さとなるものである。そこを頭頂部とよぶことにする。下の点は足の最下部となるものである。そこを足裏とよぶ。これから以後しばしば頭頂部と足裏というとき、それは頭頂部と足裏間に含まれる人体像の全長のこととつねにとりなさい。

次にいま考えられた頭頂部と足裏間の線を分ける。その間の長さが全長で最大の長さであるからである。それでそれを1とする。1を多部分に分けるのであるから、それを分ける数字が小さくなれば、それを分母とする分数の表す長さは大きく、分母の数字が大きければ、それだけその分数の表す長さは小さい。そのように理解しなさい。頭頂部と足裏間の線を1点で2等分すると、その $1/2$ は頭頂部から線の中点までになる。ついで頭頂部から足裏間の線を上から $1/3, 1/4, 1/5, 1/6$ というように $1/50$ まで、もし必要であれば $1/100$ かそれ以上まで分ける。この線の上端はあくまでも頭頂部である。それで分母の数字が大きければ、それは短い線であり、分母の数字が小さければ、長い線である。必要であれば、いま分けられた部分の長さに更に細分することもできる。これら総ての線分に分子を1とする分数を付して、それらを長い線

分から順に頭頂部一足裏間の線の横に並べる。そうすれば、一目瞭然となってそれらを利用し易くなる。この定規なり道具を用いることを「分割法」と名付ける。そして男性なり女性の人体像がかくかくの [分数の長さ] と後に言われるとき、…

Nr. 15 1523年に仕上げられた人体均衡論の草稿の、第1書の内容説明の構想。(ロンドン草稿、1523年以前、R. 2. 149頁)

第1書の目次

1. 序論。
2. 分割法の理解の仕方と使用について。
3. 7頭身の男性の測定。
4. フェアグライファーの理解の仕方と使用について。
5. 7頭身の女性。
6. 7 1/2頭身の男性。
7. 7 1/2頭身の女性。
8. 8頭身の男性。
9. 8頭身の女性。
10. 9頭身の男性。
11. 9頭身の女性。
12. 10頭身の男性。
13. 10頭身の女性。
14. 男性の頭部を更に精確に記述すること。
15. 転移法の理解の仕方と使用について。
16. 男性の手を更に精確に記述すること。
17. 男性の足についても。
18. 女性の頭部。
19. 頭部を大きくする方法。
20. 幼児。
21. 女性は男性に対して、幼児は母親に対してどのような長さの関係にあるのか。

Nr. 16 1528年の人体均衡論の序論 (ウィーン草稿、1527年頃、R. 2. 150頁、16世紀末か17世紀始めの写本)

この書ではこれら人体像の外形を点から点へと輪郭線で示すが、体の内部 [解剖] については今回は扱わない。

画家、木彫家、石工たちは勿論、金属鑄造師、金細工師、絹刺繍師、窯業家、陶工たちも人体像を作る際には、彼らのために私が前に著した書物を利用することができる。それには線、平面、立体についての測定の仕方が示される [「測定教則」(1525年刊) をさす]。その書を読んだ後ならば、他の2書については一層容易に理解されるであろう [「築城論」(1527年刊) と「人体均衡論」(1528年刊) をさす]。親方たらんと欲すれば、彼らはこの測定の理論を知るべきである。この理論を知れば、彼らは正確にしかも伸び伸びと制作することができるので、その作品には一層迫力がこもり、その仕事も一層はかどることになろう。

考えることだけでも空しいことは、1つの作品に長い時間をかけ多大の労力を注いでみても、理論を用いずに制作すればそれは徒労に終わることである。それで理解ある人々が、これらの理論を習得しようと努めることを私は切に希望する。測定について何も知らず何も学ばなかった人々には、前に挙げた書物 [測定教則] を読んでその初歩を理解することが、有益となろう。

C. 人体の比例

1. 男性の比例

Nr. 1 ウィトルウィウスを手本とする男性の肢体の尺度 (ロンドン草稿、1508年頃、R. 2. 163~165頁)

1

人体の尺度について

大きな建物のためにローマ人たちに雇われた古代の建築家フィトルフィウスは次のように述べる。即ち、建物を作ろうと思う者は人間の優れた容姿を研究すべきで、人の姿にこそ尺度の隠れた秘密が見いだされると [建築書、3の1の1]。

それで建築について述べるまえに、優れた容姿の男性とはどのようなものであるのかについて述べ、ついで女性の姿、幼児、馬について記すことにする。この方法で殆ど総てのものを測ることが

できる。

最初に、フィトルフィウスが人体の尺度について述べることに耳を傾けよう。彼はそれを当時有名であった巨匠たち、画家、鑄造師たちから学んだ。人体は次のようにあるべしと、彼らは語る[同書、3の1の2]。

顎から髪際までの顔の長さは、人体の全長の1/10である。手を真っすぐにのばした長さも同じである。人の頭部は1/8、胸の高さから髪際までは1/6である。髪際から顎までは3分される。最上部は額、第2部は鼻、第3部は口と顎になる。足の長さも全長の1/6、腕は1/4、胸[両肩間の幅のこと]は1/4である。

このような比例を人像全体に見いだしながら、彼は次のように述べる。即ち、両手両足を真っすぐに伸ばした状態で人を地面にねせてコンパスの支点を臍におけば、両手両足は円周に接すると。このようにして、人の肢体から円を構成することができることを、彼は見いだそうとした。

また同様にして、足裏から頭頂部までの長さを測り、その長さ分の幅で両手を水平に伸ばせば、そこから正方形が生ずることも見いだされる。こうして彼は四角形の構成を示す。このようにして彼は古代人も現代人も覆すことのできないような確実な秩序のもとに、人の肢体を集合させて全身の完全な均衡へともたらしたのである。詳しく知りたい者は、彼の書物を読むがよい。そうすれば、人体構成法の最良の理論を彼がそこに示していることが分かるであろう。(挿図1)

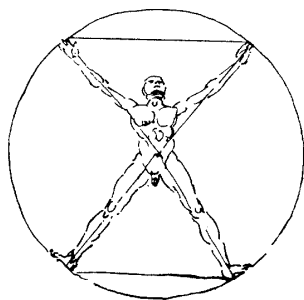
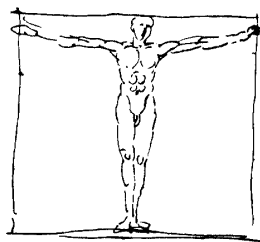


図 1



Nr. 2 男性の正面比例像(ドレスデンのスケッチ帳から、1507/08年頃、R. 2. 165~166頁)

1と3(両方とも素描に記された断片的覚書。今回は省略)

2

1本の線を引いて8部分に分ける。上をaとする。最初の1/8は頭部になる。

大円は腕になる。それは1/4の長さである。その中心は心臓のくぼみである。小円の直径は大円のそれよりも1/4ほど小さい。その中心は大円の円周上にある臍である。小円の下端は鼠蹊部である。そこにaと記す。

コンパスをとり、いま述べられたa点にその支点をおいて、他方の脚を心臓のくぼみにまでひろげる。そしてそれを臍まで移動させて大きな円弧を描く。それが大円と交差する点にb, cと記す。腕の位置はその高さから始まる。(挿図2)



図 2

Nr. 3 8頭身男性の正面比例像（ロンドン草稿, 1507/08年頃, R. 2. 166~167頁）

男性像の比例関係を全身に互って測ろうと思えば, その男性の身の丈に当たる直線とその中点を通る水平線を引く。その直線を6等分し, 更に8等分する。その1部分は頭部の長さである。

8等分したその直線を更に10等分する。その1部分は顎から髪際までの長さである。

次に髪際から顎までの顔を3分する。最初の部分に眉毛が含まれる。第2部分で鼻は終わる。第3部分に口と顎がある。

最上部の1/6の下に高さも幅も1/6の正方形を作る。顎から心臓のくぼみまでの長さは頭部のそれと同じである。顎から髪際までの顔の長さは, のどの凹みから乳頭までのそれと同じである。眉毛から顎までの長さをコンパスの半径として, 支点を心臓のくぼみにおいて円弧を描けば, それは両側で乳頭に接する。最初の正方形の下辺から下1/20の距離に1点を定める。そこが臍である。(上記に続く文は, 今回は省く。挿図3)

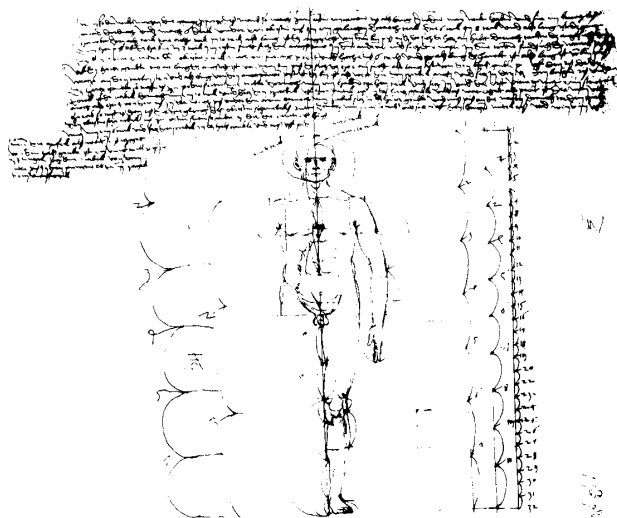


図3

Nr. 8 8頭身の頑丈な男性（サムソン, ヘラクレス）の比例。頭部の側面と正面（ロンドン草稿, 1512/13年, R. 2. 169~171頁）

最初に人体像について記述しよう。

先ずサムサンやエルクレスのような頑丈な男性について測定する。次のようにしなさい。

身長 $\frac{1}{8}$ の高さの四角形を3つ並べて, それに頭部をつくる。頭頂部は上の線に, 顎は下の線に接する。

先ず顔の側面像のための四角形を作る。その四角形の幅を $\frac{2}{17}$ とする。一方顔の正面像と背面像の四角形の幅はそれぞれ $\frac{1}{11}$ とする。

顔の側面像の四角形の前の垂線を a, 後ろの垂線を b とする。前とは鼻の出ている方向をさす。

また上の水平線を x, 下の水平線を z とする。

垂線 ab 間を6本の垂線で7等分して, それらの線を cdefgh とする。

線 z から上の $\frac{1}{11}$ の所に水平線 j を引く。

水平線 jz 間を2本の水平線 kl で3等分する。

水平線 x・垂線 c の交点と, 同じく a・l の交点を線で結ぶ。この斜線と水平線 j の交点が額の髪際となる。額の露出部の線は水平線 xj 間の中央まで引かれる。後頭部のつむじは水平線 xj 間と垂線 bh 間のなす領域の中央に位置し, その中央から頭部の円い線は水平線 jk 間の垂線 b まで引かれる。そしてその頭部の円い線は水平線 kl 間の半ばまで引き込まれる。頭部は垂線 bh 間と水平線 kl 間のなす領域の中央で特別のくぼみをもつ。そのくぼみの線を垂線 h・水平線 l の交点まで引き下げる。垂線 h は頭部の後ろに接する。

頭頂部は垂線 f・水平線 x の交点に接する。そこから頭部の線は額の髪際と後頭部のつむじまで円く引かれる。

髪際のある方の頭部の露出部は, 垂線 ef 間の中央までくる。

額の線は, 垂線 c・水平線 x の交点から垂線 a・水平線 l の交点に引かれた斜線のうち水平線 jk 間をしめ, 髪際では垂線 ca 間の [a からみて] $\frac{2}{3}$ の点を, 下端ではその $\frac{1}{3}$ の点を通る。

水平線 kl 間に鼻の線を引く, 前記の斜線の下部にその形を描く。

鼻翼は水平線 kl 間の下 $\frac{1}{4}$ にとどまる。垂線 c は鼻の後ろに接する。

垂線 ac 間と水平線 lz 間のなす領域の中心に垂

線を立てる。それを q とする。この線は上唇の前に接する。垂線 qc 間を 2 本の垂線で 3 等分する。前の線は下唇と顎の前に接する。後ろの線は唇下と顎上の間のくぼみに接する。

顔の形を次のように作る。即ち、水平線 lz 間を 1 水平線で 2 等分する。それを o とする。水平線 lo 間を [1 水平線で] 2 等分する。それを p とする。水平線 o は顎の上に接する。水平線 p は口の中央を貫く。垂線 c は口の後ろに接する。

水平線 lp 間を 3 等分する。その下部は上唇の厚みにあたる。上の 2 部分は鼻溝になる。水平線 po 間を 2 等分する。上部は下唇の厚みになり、下部は唇下と顎上の間のくぼみになる。

垂線 gh 間と水平線 kl 間のなす四角形に耳を作り、耳朵の高さを kl 間の下 1/4 に、またその幅を gh 間の頬側の半分にとどまらせる。そこから頬の線を顎にむけて水平線 z まで引きおろす。顎下の頸部の厚さは 1/15 である。

眉毛の線は水平線 k 上に引かれ、垂線 cd 間の中央で上がり、垂線 d はその後ろに接する。

眼の線は水平線 kl 間の上 1/3 に引かれる。垂線 c は眼球の前に接する。眼球の後ろは垂線 cd の中央にくる。そして図に見るように、もう 1 本の線を引く。

次に顔の正面像をその四角形の中に作る。

その各部分の高さは、顔の側面像から、正面像に引かれる水平線で先に決められる。それで各部分の幅を決める垂線だけを引けばよい。

Nr. 9 8 頭身の頑丈で美しい男性の比例。頭部の側面・正面・背面・平面像。人体の側面・正面・背面像。男性像の屈折 (1 はニュルンベルク草稿, 2 はロンドン草稿, 3 はドレスデンのスケッチ帳から, 1512年, R. 2. 171~177頁)

1

イエズス マリア 1512年

前に作ったものに間違いがあった。これから作るものの方がもっとよい。

頑丈で美しい男性の比例を作る。

前述のように、分数の分数を用いて先ず頭部から測る。男性像の全長の 1/8 を高さとする四角形の中にそれは作られる。

側面・正面・背面像のための四角形を 3 つ並べて作る。

側面像のための四角形の幅は 1/8 である。一方向正面像のそれは 1/11 である。背面像のそれも同じである。

鼻の突き出た方が前である。その反対が後ろである。

顔の側面像を四角形の中に作ることから始める。その中に垂線を引いて各部分の [正面からの] 厚さを決める。記憶のためにそれらに文字を付す。

後ろから 1/8 の 1/9 の所に垂線を引き、それを a とする。この線は眼の前の方のすみと鼻翼の後ろに接する。

後ろから 1/8 の 1/10 の所に垂線を引き、それを b とする。この線は眼の後ろの方のすみと顎下のくぼみに接する。

ab 間を 6 等分し、そのうちの ab に最も近い所に 2 本の線を引き、それを cd とする。

線 c は眼球の前と上下の唇の間のくぼみに接する。

線 d は眼の後ろの方のすみの内側にくる。

後ろから 1/8 の 1/4 の所に垂線を引き、それを e とする。この線は眉毛の後ろに接する。

四角形の中の前の方の 1/8 と 1/9 の中間に垂線を引き、それを f とする。この線は額の髪際と上唇の前に接する。

四角形の中央に垂線 g を引く。この線は髪と顔の露出部を分ける。

垂線 a から後方 1/11 の所に垂線を引き、h とする。この線は、頸部の丸みがそこから始まる後頭部の最下部に接する。

頭部と接する所の頸部の幅は 1/15 である。

前から後方 1/14 の所に垂線を引き、それを i とする。この線は耳と頬を分ける。

垂線 b から後方 1/11 の所に垂線を引き、それを k とする。この線は後頭部のつむじに接する。

垂線 hk の中間に頭部は特別のくぼみを持ち、

それは鼻翼上の顎部の高さまで続く。

前から後方1/11の所に垂線を引き、それをjとする。この線は耳の後ろに接する。耳朶は垂線lj間の、頬側の半分にとどまる。

以上で垂線は引かれた。次に各部分の高さを決める水平線を引く。

上から1/8の1/4の所に水平線を引き、それをmとする。この線と垂線kの交点が後頭部のつむじの位置になる。

またこの線と垂線gの交点が額の後ろの高さになる。

上から1/8の1/3の所に水平線を引き、それをnとする。この線と垂線fの交点が額の髪際になる。

額の髪際から四角形の最下部まで2水平線で3等分する。それらの線をopとする。

その最下部の中央に水平線を引き、それをqとする。この線と垂線hの交点が顎部に接する後頭部となる。

顎は四角形の最下部と水平線qに接する。

水平線pqの中間に上下の唇のくぼみがくる。上唇は鼻と口のくぼみの間の下1/3にとどまる。

下唇は口のくぼみから顎までの上半分にあたる。それは下唇よりも厚みがある。

下唇と顎上の間のくぼみの線は巧みに引かれねばならない。

垂線ljと水平線opのなす四角形に耳全体は含まれる。

下の耳朶の長さは耳の1/4である。

水平線op間の上1/3に眼全体は含まれる。その1/3の中央に水平線が引かれる。この線は眼の両方のすみを貫く。眼球はその中央に位置する。その直径はop間の1/6である。

上瞼の厚さは眼球の半分である。それは眉毛のすぐ下にくる。人をよく見なさい。下瞼の厚さは上瞼の2倍であり、下の線をこえる。

眉毛は垂線dの所で水平線oの少し上になり、垂線eの所で再び水平線oの下になる。

水平線pから水平線oにむかって1/4の所に鼻翼の高さがくる。

額の髪際から水平線pの前端までを直線で結

ぶ。その前端が鼻の下端になる。この斜線が額と鼻の形を決める。

この斜線は水平線no間の2倍の長さである。

[この斜線のno間の]上2/3に額の膨らみの線が引かれる。

下1/3に眼の上の隆起がくる。

眉毛の下の鼻の線は[水平線oから]水平線pにむかって[op間の]1/3ほど下まで直線で引かれる。

それから下の鼻の線は斜線の直線より僅かに下になりながらすすみ、その先端は突出する。

次に顔の形態の線を賢明な仕方では四角形の中に引き入れる。

額の髪際の所を隆起させる。額の線を引く。次に鼻と口の線を引く。

垂線fは上唇の前に接する。

一方下唇は垂線fから[垂線af間の]1/3ほど後方にある。

同じ垂線fは顎の前に接する。

下唇と顎上の間のくぼみは、fから垂線af間の1/3の所にくる。

次に顎、頬、耳の線を引く。

そして額の所を再び隆起させて、そこから頭部の円い線を上に引きあげ、後頭部の後ろにまでまわして、その線を完全に顎部まで引き下げる。本文の後に付けた図に見るようにである。

次に垂線で顔の正面像を区切る。

その区切りかたは、顔の正面像の四角形の1/11の幅をもとにしてなされる。

四角形の中央に垂線を引き、それをaとする。この線は額の髪際に接し、鼻と口と顎の中央を通る。

四角形の右端から1/12の所と左端から同じ1/12の所にそれぞれ垂線を引き、それをbcとする。

この2線は耳と頬とそのそばの髪を分け、額の両側の高さを決める…

耳朶は頬のそばの[小さな]方形の半分にとどまる。

1/11の1/6の長さの線分を3つとり、それらを四角形の上中央に横に隙間なく並べて、その両端か

ら 4 本の垂線を引きおろし、それらを defg とする。

中央の1/6から下ろされた 2 本の垂線の間、鼻は含まれる。口の幅は、それが側面像で ac 間をこえるのと同程度に、ef 間をこえる。

顎も両側で同程度にこえる。

鼻は両眼の間にあり、ef 間の1/3の幅である。

一方下の鼻先の幅は ef 間の半分である。鼻翼は ef に接する。

鼻の1/3は美しい曲線を描き、その上は僅かに突起する。

鼻溝 [の長さ] は6/11の1/6である。また顎のくぼみ [の長さ] は6/11の1/5である。

両眼のすみは de 間と fg 間に含まれる。

眉毛の両端は bd 間と gc 間にくる。[四角形の両端の垂線から] b と c のそれぞれに対してその間の1/3の所に垂線 hi を引く。

頸部の幅は1/16である。[その幅を示す]垂線 kl を引く。

これから実際に、数字と文字の付された図解に見ると同じ仕方で、顔の正面像の総ての線を引きなさい。その図解は大いに君の指針となりうる。

顔の正面像に則って頭部の背面像の総ての輪郭線を引く。その後他の内容をそこに描き込む。

顔の平面像のための図形を、前記のように、顔の側面像と正面像からの平行線で作る。

次に男性の人体像を 3 本の線上に並べて作る。最初の線には側面像、第 2 の線上には正面像、第 3 の線上には背面像を作る。

頭部の長さを [全長の] 1/8にして、それをその位置に定める。総ての肢体部の高さを示す水平線を 3 本の垂線を買いて引く。

頭頂部からのどの下まで1/7である。

頭頂部からのどの凹みまで1/6である。

頭頂部から背中の腋下まで1/4である。

頭頂部から脇腹まで1/3である。

男性の股間から足裏まで全長の1/2である。

のどの凹みから胸の乳頭まで1/11である。

のどの凹みから前の腋下まで1/14である。

腋から1/13上で肩はもり上がる。

のどの凹みから1/9下に胸下はくる。

のどの凹みから臍まで1/5である。

腰からその下端まで1/11である。

脇腹から腹の下端まで1/8である。

臍から陰茎まで1/9である。足裏から足の甲の高さまで1/20である。

足の甲とのどの凹みの間を 2 本の水平線で 3 等分する。

最初の線は腰を通る。第 2 線は膝を通る。膝上の線は [膝中央から] 1/28の所にある。

膝下1/28の所で膝全体の形が示される。

膝中央から下1/8の所に外側のふくらはぎの下端はくる。

[膝中央から] 1/28下の膝から1/9下に、内側のふくらはぎの下端はくる。

男性の股間から1/10下の、膝の上の両大腿部間には特別の隙間がある。

臀部の割れ目は1/11である。

次に腕の長さを測る。

のどの凹みの高さから肘まで1/5である。その肘の中央で肩からの肉の隆起は終わる。肘から指先まで1/4である。手の長さは1/11である。

手を 3 等分する。親指の長さはその中央にあたる。

肘から1/11下の所で腕の隆起は終わる。

以上が男性の肢体部の長さである。

さて次に男性像の厚さと幅を測ることにして、先ず側面像の厚さをいま引かれた総ての水平線上で測る。

のどの凹みの線での体の厚さは1/13である。

胸の乳頭上の厚さは1/7である。

胸下での厚さは1/8である。

脇腹での厚さは1/9である。

臍上での厚さは1/9である。

腰上での厚さは1/8である。

腹下の、臀部上の厚さは1/8である。

陰茎と臀部上の厚さも1/8である。

男性の身の丈の中程、つまり大腿部の臀部の下

端の所の厚さは1/9である。
 臀部の下の大腿の厚さは1/10である。
 そこと膝との中間部の厚さは1/11である。
 膝上の厚さは1/15である。
 膝中央の厚さは1/17である。
 膝下の厚さは1/19である。
 ふくらはぎ中央の厚さは1/15である。
 ふくらはぎ下端の厚さは1/18である。
 その下の足の上の厚さは1/25である。
 足の長さは2/13である。
 足の親指はその前1/3に含まれる。
 次に腕の側面の厚さを測る。
 肩での腕の長さは1/11である。
 腋下での厚さは1/16である。
 力こぶ中央での厚さは1/18である。
 肘での厚さは1/24である。
 肘下での厚さは1/21である。
 更にその下の厚さは1/30である。
 手の厚さは1/38である。
 手の上の厚さは1/29である。

2

次に男性の正面像の総ての幅を測る。
 頭部の上の所は1/8である。
 のどくびの頸部の幅は1/16である。
 肩上下での幅は1/4である。
 両腋間の幅は1/6である。のどの凹みの線の両肩
 関節間の幅も同じである。
 胸の乳頭間の幅は1/9である。
 胸下の肋骨での幅は1/10である。
 脇腹での幅は2/13である。
 腹の半ばの、臍上で脇腹下の体の幅は1/12であ
 る。
 臍下の腹の幅は1/10である。
 腰上の幅は2/11である。
 男性の中心になる所の大腿の幅は1/11である。
 陰茎の下の大腿の幅は1/11である。
 男性の中心にあたる所から1/10下の、大腿の幅
 は1/14である。
 膝上の幅は1/18である。

膝中央の幅は1/20である。
 膝下の幅は1/22である。
 ふくらはぎ中央の幅は1/16である。
 外側のふくらはぎ [下端] 線上の幅は1/18であ
 る。
 内側のふくらはぎ下端の幅は1/22である。
 脚の下部の幅は1/35である。
 足の前の幅は1/16である。
 次に腕の正面の幅を測る。
 腋下の腕の幅は1/22である。
 肘上の幅は1/26である。
 肘下の幅は1/19である。
 肘下の、腕中央の幅は1/26である。
 手関節の幅は1/35で、手の幅は1/19である。

さて次に各肢体部の長さや幅を示す、大きさや
 点の書きいれられたいま引かれた線に、男性の形
 態の線を引き入れる。そして特に臍の中央を通っ
 て腹を裁断する線を引き入れる。あたかも男性の
 体が2部分からなるかのように。その後君が図解
 にみるように、他の線も引き入れる。

これらの線は極めて柔軟にしかも正確に引かれ
 ねばならず、それを見て人が軽やかに感じるよう
 にしなければならない。優れた理解力があれば、
 以下の図解に君が見るように、その人は男性像の
 側面・正面・背面の好ましい形をそこに見いだす
 であろう。

男性の側面像を屈折させる場合には、図解で
 abcdefgh と記される、背骨を貫く各水平線の大き
 さの、背中よりの1/3でつねにそれを行う。

[この箇所の意味やや不明]

腰と膝と足首の中央には jkl と記される。その
 中央で屈折がおこる。そして肩は中央の o 印の所
 で屈折する。

男性の正面像を背骨の中央で屈折させる。

肩を o 印の所で屈折させる。そして腰関節を ab
 の印の所で屈折させる。

膝と足首をその中央で屈折させる。

腕をその関節で屈折させる。

背面像の輪郭線を正面像のそれを用いて描く。

後ろの両腋間の幅は1/5である。そして後ろの踵の幅は前向きの足の半分である。

3

[挿図4に次の文字が書かれている]

側面像に：aからlまでの文字。中央。この紙の裏を見れば、数字や垂線・水平線のない男性の形態を君は見る。

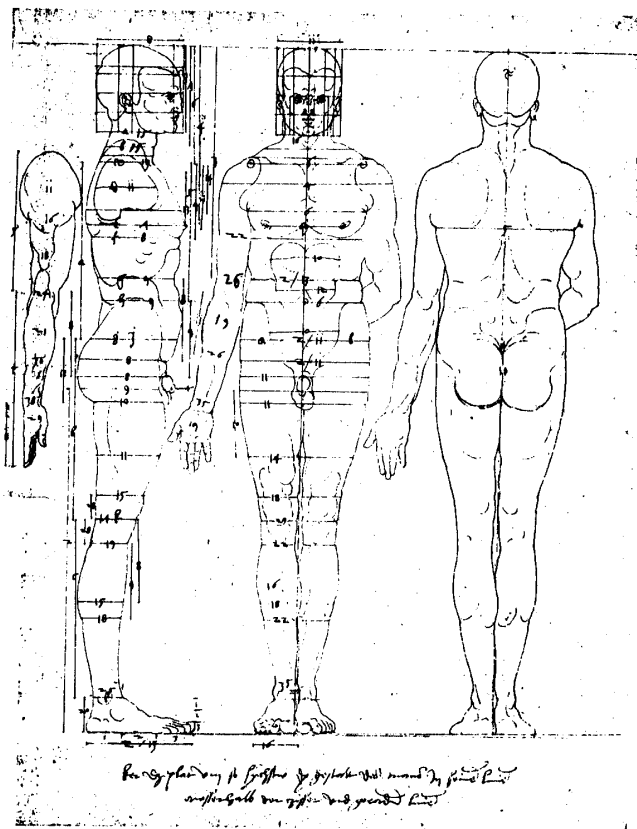


図4

これらの尺度が大きすぎて、ごつごつした感じを与えないようにしなさい。像を屈折させて顔の向きを正しく見せたいと思えば、光と影をそれと与えなさい。正しく行えば、この尺度を用いて描いても、その図解は粗雑すぎるように見えないであろう。

(Nr. 4~7は今回は省略する)

挿 図 一 覧

- 図1 ロンドン草稿, 5280 fol. 2のデューラーの素描, 1508年頃, 大英博物館。
- 図2 : ドレスデンのスケッチ帳より, デューラーの素描, 1507/08年頃, ドレスデン, 国立図書館, 29.4×20.8 cm, Strauss 8。
- 図3 ロンドン草稿, 5231 fol. 1と2のデューラーの素描, 1507/08年頃, 大英博物館, Strauss HP 1507/13。
- 図4 ドレスデンのスケッチ帳より, デューラーの素描, 1512年, ドレスデン, 国立図書館, 29.3×20.8 cm, Strauss 31。

挿図説明の Strauss と Strauss HP は以下の略称である。

Strauss: L. Strauss, Walter, Albrecht Dürer. The Human Figure. The Complete 'Dresden Sketchbook' New York 1972.

Strauss HP: L. Strauss, Walter, The Complete Drawings of Albrecht Dürer, vol. 5 Human Proportions, New York 1974.